

東日本大震災復興支援事業 東北応援ツアー レポート

折戸 裕子 1987年卒業 文学部 C 福島県相馬コース

「生きがいと誇りを取り戻すためのたたかいは始まったばかり」

そう語る、遠藤川内村長の言葉が胸に深くしみた。3年半経過した今も「始まったばかり」なのだ。10月半ばですでに紅葉が始まる川内村をパスで数十分走っても、人影を見かけることがない。やっと最初に出会ったのは、耕運機に乗った初老の男性だった。自然豊かな村なのに人がいない。この事実が、目に見える被害なのだと思う。人のいない村の空気に寂しさと一種のこわさを感じた。

労働組合のボランティアで東北へ行った友人や、半年・1年と業務で派遣された同僚から口を揃えていわれていたこと=それは現地に足を踏み入れ、マスコミでは紹介されていない事実を自分の五感で感じるべきだと。その契機となった今回の応援ツアーでは、『目に見えないものとのたたかいを見る』という目的意識を持って動いた。

除染した土が入った一見普通のゴミ袋が、一般家庭の庭に置かれている。それは行き先のない袋。中間貯蔵施設の建設後に搬入というのが、放射性物質を受け入れる施設をどこの自治体が容認するだろう。IAEA(国際原子力機関)と連携し、研究拠点の整備プロジェクトが進んでいるのは救いだが、先はまだまだ永い。

除染も放射能の測定も、すべてが初めて経験することばかりで、安全基準や“どこまで”といった線引きがすべてのことにおいて曖昧で、住民の不安が払拭されないのは無理ない。

村長がおっしゃるキーワード「選択・判断・自立」は、あくまでも村民の意向を尊重するもので、行政に働く者として指針をもらった。

四大被害(1 地震 2 津波 3 原発 4 風評被害)に立ち向かう東北のことを「知ろうとする努力を忘れない」ことが復興支援になるという、現地の校友の皆さんからの熱いおもいに応える行動を続けて行こうと思う。

全国から集まってこられた、年齢も仕事もさまざまな校友のみなさんと交流したことも刺激になった。